

# 会員だより

## 終戦75年節目の日

### 戦争の記憶を語る!!

終戦の月にちなんで戦争のときの話を聞かせてほしいという話がありました。7、8名の人が集まってくれました。

私は戦争が始まったときにはすでに大阪中央電話局南分局に就職していました。昭和15年のことです。開戦は、翌年12月8日です。私の勤務先は道頓堀北詰の近くでしたので、毎月8日には出勤前に全員で高津宮に戦勝祈願に参拝しました。



毎月8日に全員で参拝した高津宮  
戦火を浴び焼失前の高津宮(こうづぐう)写真

開戦後2年ほどは勝った勝ったと浮かれていましたが、だんだん戦局が不利になり、敵機が空襲が始まりました。空襲警報が発令されるとあらかじめ用意された非常持ち出しの袋を担いで、

で、電話線を引き込んでいる地下のマンホールへ避難します。勿論電話の仕事は、一時も止められない国の仕事ですから何人かの職員は交換台を死守します。近畿では兵庫の葺合分局で6名、兵庫分局で5名の方々が殉職しています。

ある日、空襲警報が出て避難しているとき、近くの下寺町に爆弾が投下されました。大地震のような震動と凄惨な爆音に私たちは震えあがりました。それから約1週間、3月13日の大空襲になりました。私はその日は宿直明けの休みで家に居ました。近郊に疎開していたので大分離れていましたが、

宿直の方々はどうなんでしょうか。どなたでしょうか。どんなに怖かったでしょうか。翌日、日本橋の上へ避難していた方たちは、出勤してきた人のお弁当を貰って箸がなかったので靴べらで泣きながら食べたということです。



空襲後の大阪市街  
左端南海難波駅・右手前には松坂屋大阪店

この日の空襲で受けた大阪の被害は甚大なものでした。職員で連絡の取れない人も多数ありました。大阪は焼け野原となりました。当時高い建物はあまりなかったもので、屋上に上がるとずっと遠くまで一望でき、あまりの無残さに呆然としました。10日以上たつても火が入った蔵が燃え続けていました。幸い鉄筋の機械棟は助かったので、自動(ダイヤル式)の電話は使えましたが、肝心の掛けるための加入者の電話が焼けて無くなったのですから、通話数は激減し

ました。私たちの局は大阪市内の公衆電話から交換手が接ぐ手動式で行われていました。それが公衆電話ボックスがみんな焼けてしまったので、全く仕事がなくなりました。そこで始めたのが農園でした。焼け跡の瓦礫の除去から始め広い農園で見事な野菜などを作り、雑炊などにして食べました。当時の食糧難を思い出すと、とても素晴らしいことでした。その後も米軍による爆撃は繰り返し徹底的に行われ、大阪は壊滅し、敗戦となったのです。

そのうち進駐軍が入ってきてなんでも「進駐軍の命により」が枕詞のように付けられて実施されました。徐々に復旧してきた公衆電話から進駐軍の兵士から接続の要求があると、特別訓練を受けた即席の丸暗記のたどたどしい英語で担当のチーフオペレーターへ接続しました。その後アメリカの管理下にあつても日本の国は驚異的な力で復興を遂げ徐々に国力を回復したのです。

記：牧戸富美子

アマビエバックで  
コロナ沈静化を願う!!  
7月27日総持寺に、アマビエバックを持って参拝しました。

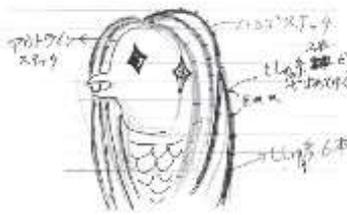


アマビエバックを持って  
総持寺参拝

難しいので手でまつりつける。  
②背景の波頭、顔、目、耳の輪郭及び身体の鱗をアウトラインステッチで仕上げる。刺繍針を使用し、刺繍糸3本どり位が良いと思います。

世界的にコロナ感染者が爆発的に増えています。私たちは早期終息を願って、アマビエバックを作りました。アマビエは、V.G概輪だより会報第188号に記載されています。アマビエが「疫病が流行した際は、私の絵を描いて人々に見せよ」と告げて姿を消したと伝わる縁起の良い妖怪です。

新聞にアマビエの絵が載っていましたのでコピーをして使いました。  
①カーボン紙でアマビエの絵を布に写します。この時布は絵より四方を1.5cm大きくする。  
後で布を折って袋に縫い付けるためです。既製品の袋に縫い付けるのはミシンでは



アマビエバックの作り方  
(コロナの終息を願って作る)

記：青木幹子